

## 巻頭言

惑星科学会創立期に大学院生だった私は、ある先生から「今、入会予約すれば、一桁の会員番号かも知れないよ」と勧誘されたが、既に三つほどの学会に入会していたために躊躇してしまった。ところが自分の所属していた「地球科学科」も「地球惑星科学科」と改名することになり、多少の絵心が有ると勘違いされた私に宣伝のためのポスターを何か描けという指令がきた。どうにも良い案が出ず、「天文学と惑星科学と地球科学の違いは何でしょうか？」と周りの先生や先輩に聞くと、そこにある物質を取ってこれられないなら「天文学」、そこにある物質を扱えるなら「地球科学」、その間で太陽系ぐらいなら「惑星科学」とのコメント。高圧地球科学分野での研究を始めた自分は「隕石は勝手に落ちてくるし、マントルや核の物質は自由に取れないけどなあ…」と悩みながら、空想の惑星に降り立った子供が他の天体を眺めているポスターを構想し、こんな風景を人類が見るのはいつだろうと思いつつながら仕上げ、学会入会は大家先生の退官となる東北大での開催でまで引きずってしまった。

時は流れて学会は四半世紀を超えた。現在、私が所属する専攻は、地球科学と天文学が半々同居という全国的にも奇異な構成で、生命系から物性物理の教員まで含まれる「オール理科」みたいな印象。赴任時は天文系と地球系の接点を見出すのが難しかったが、「惑星科学」という中間的な観点からは、天文系は系外惑星探査が普通になり、惑星を扱うシミュレーションにも物性的要素が入り「地球科学」の範囲にかなり近づいてきた。一方、日本の探査機は小天体からのサンプルリターンを実現し、太陽系外縁部でさえ遠くて近寄れない「天文学」というイメージが崩れてきた。物質科学や宇宙生命などの接点も含め、「惑星科学」は「中間の科学」では無く「中心の科学」になってきたと感じる。と言っている間に令和の新時代に突入した。次は自分も何らかの接点になればと思う。

近藤 忠(大阪大学)